



低価格茶のニーズが高まっているが、おいしければ値が高くても売れる

今後の茶業を語り合う お茶みらい座談会60人参加

地域住民有志のまちづくりの会「かねね四季の会」が主催するお茶みらい座談会。今年にはハラダ製茶(株)の原田康代表取締役社長を招いて開かれました。先行き不透明な経済情勢の中、今茶業界に必要なものとは。現場レポート。

原田さんは「お茶の現況については過剰感がある。マイナス思考が蔓延してきてしまっている。低価格茶への嗜好へと移行しているが、そんな時代でも『おいしければ高くても売れる』傾向にある」。など、具体例を挙げ

「ハラダ製茶(株)原田康代表取締役社長を招いて開かれた座談会(講演)会では、厳しい国内外の茶業界の現況や消費者の嗜好の変化などについて、広い見識とグローバルな視点で講演。参加者は真剣な表情で耳を傾けました。」

かねね四季の会(太田起博代表)が主催するお茶みらい座談会は3月20日、フォーレなかかね茶茗館を会場に開かれ、町内外の茶業関係者など約60人が参加しました。

お茶の現況と未来について熱く語ったハラダ製茶(株)原田康代表取締役社長



会終了後は、受賞茶を飲みながら情報交換。みな、茶業の行き先について熱心な意見が交わされていた。

会終了後には、第48回静岡県茶品評会1等1席・農林水産大臣賞を受賞した川根香味園のお茶を飲みながら一服タイム。ここでも、今年が一番茶の作柄などにについて、参加者同士、熱心に情報を交換していました。

講演後、参加者からは多くの質問が投げかけられました。お茶農家の女性からは「昨年からのインターネット販売を始め、どのようにして顧客を獲得すればいいか」と質問があり、それに対し原田社長は「インターネット市場は広く、誰もが簡単に算入できるので、そこで成果を上げるのは非常に難しい。まずはホームページを見てもいいこと(消費者が飲んでみたいと思うようなお茶のパッケージなど)の工夫が必要であり、地道に努力することが大切」と答えました。

ながら話し、また今後の茶業の展望について、茶業以外の分野と融合する必要性について提案されました。「ただお茶を売るだけではなく、飲み方などの雰囲気づくりの演出が必要な時代です。観光と結び付けるなど、どうしたらおいしく感じられるのかというイメージ戦略が必要」です。

一般的に、積み木の材料には硬い広葉樹が好まれています。4月3日、三ツ星保育園に出向いた佐藤公敏町長は、園児たちに直接、積み木を手渡ししました。プレゼントされた三ツ星保育園の上野園長は「スギの積み木は軽くて、軟らかさがあり、また温かみがあります。乳幼児が安全に楽しく遊べます」と喜んでいました。



乳幼児のころから木と触れ合う環境をつくる

木の温かさに触れよう 園児たちに積み木の贈り物

町産業課ではこのほど、県の支援を受けてFSC森林認証木の積み木を製作。町内の各保育園などにプレゼントしました。きっと今日も子どもたちは、温かみのあるこの積み木で遊んでいます。

本町は、静岡県が進める「しずおか林業再生プロジェクト推進事業」の支援を受け、FSC森林認証木製の積み木を製作し、町内保育園、幼稚園、子育て支援施設の計5カ所にプレゼントしました。この積み木は、FSCで認証された町有林のスギを材料として、ひのき屋(藤枝市)が製作したもので、丸太10本から8,800個が製作され、スギ製の茶箱に詰められています。この事業は、乳幼児のころから木と触れ合う環境をつくる「木育」の事業の一環として位置付けられています。町の資源・産業である林業への理解を深めていくと共に、森林環境保全の認証制度であるFSC森林認証の啓発を図ることを目的としています。

これは積み木としての機能を重視するためです。針葉樹の場合はヒノキがほとんど。スギは、軽さや硬度、弾力性、温かみなど子ども向けとして利点が多く、そのほかにも赤色と白色のコントラストや木目の美しさなど、独特の特長があります。その一方で、それがそのまま欠点となってしまう場合もあるようです。担当課では今回、あえてスギ材を採用しました。スギの特質や欠点とされている部分を乳幼児のころから肌で感じて欲しいと願いが込められています。



茶箱にきれいに納められたスギ製の積み木。平成21年度しずおか林業再生プロジェクト推進事業の支援を受け製作された。事業費は約89万円。材料のスギは、FSC森林認証林の町有林スリバチクボから搬出された丸太10本、8,800個製作され、各園1,760個ずつプレゼントされた。